

事件の表示 平成11年(ワ)第764号, 同12年(ワ)第5341号

本人調書

(この調書は, 第16回口頭弁論調書と一体となるものである。) 裁判所書記官印

期 日 平成15年7月9日午前10時00分

氏 名 金 中 坤

年 齢 79歳(1924年11月1日生)

住 所 大韓民国済州市老衡洞943 国民連立ラ棟203号

宣誓その他の状況

裁判長は, 宣誓の趣旨を説明し, 本人が虚偽の陳述をした場合の制裁を告げ, 別紙宣誓書を読み上げさせて, その誓いをさせた。

後に尋問されることになっている証人は, 裁判長の許可を得て在廷した。

陳述の要領

別紙反訳書のとおり

以 上

原告ら代理人（伊藤）

甲H第31号証を示す

これは、あなたが私たち弁護団に話をして、私たち弁護団がまとめた書類ですね。

はい。

内容はあなたも確認されましたね。

はい。

特に間違いはないですか。

ありません。

表紙の署名捺印はあなたが御自身でされたものですね。

そうです。

あなたの妹であるキム・スンニエ（金淳禮）さん、あなたの奥さんでいらっしゃるキム・ポンニエ（金福禮）さんは、いずれも勤労挺身隊として、名古屋三菱道徳工場に動員され、妹さんは1944年の12月7日、東南海地震で亡くなったんですね。

はい。

奥さんのキム・ポンニエ（金福禮）さんは、原告としてこの裁判を起こした後、2001年2月13日に亡くなられたんですね。

はい。

それで、あなたがこの本件の損害賠償等の請求権も御相続されたというわけですね。

はい。

これからあなたに、勤労挺身隊に関する事情などをお尋ねしていきますが、キム・スンニエ（金淳禮）さんのことを妹さん、キム・ポンニエ（金福禮）さんのことをキム・ポンニエ（金福禮）さんあるいは単に奥さんと呼んでお尋ねしていきますね。

はい。

あなたは、1924年11月1日に生まれたとのことですが、生まれた場所はどこでしょうか。

韓国のチョンラブクト（全羅北道）のスンチャン（淳昌）というところで生まれました。

その後は、実家がクワンジュ（光州）に移られたんですかね。

はい。

いつごろ移られたんでしょうか。あなたが普通学校の時ですか。

2年か3年のとき移ったと思います。

普通学校の2年か3年のころ、まだ小さいころですね。

はい。

普通学校というのは、現在の日本で言うと、小学校に相当する学校ですね。

はい。

御両親は何をして暮らしておられましたか。

父は地主で、土地を持つって、農業をやっって、母はクワンジュ（光州）に移った後、料理屋をしていました。

クワンジュ（光州）での料理屋は、お父さんも手伝っておられたんですかね。

はい。

それで、あなたは、普通学校をクワンジュ（光州）で卒業されたというわけですね。

はい。

その後、あなたは、15歳のときに日本に留学をし、帝塚山工業から転校して関西工学校を卒業されたと。その後、日本大学の法学部に入学したんですが、1944年5月に中退をして、韓国に帰国をされたということによろしいですね。

そうです。

日本に留学したのはどのような理由からでしょうか。

ちょうどあのとき、戦争中だったもので、私がクワンジュ（光州）にある農業学校を受けましたが、そこをうまくいけなくて、父のほうから、日本へ行って勉強しろと、そう言われて、うちの知っている日本の警察の方に依頼して、日本へ来るようになって、日本で勉強するようになりました。

お父さんが、日本留学を勧められたということなんですね。

はい。

お父さんには、あなたに対する期待というものがあつたんでしょうかね。

はい、ありました。

どのような期待なんでしょうか。

お父さんは、長男に当たる私に、これからもっと勉強して、家を助けるのには、勉強しないといかないから、しっかり勉強してくれと、そういった期待を持っていました。

あなたは長男でいらっしゃるわけですね。

はい。

家族を養い、守っていくために、上級学校に進学をして、社会的に一人前になるようにと、こういう期待なんですね。

はい。

あなたが今言われたクワンジュ（光州）の農業学校、クワンジュ（光州）農業学校という学校ですね。

はい。

クワンジュ（光州）農業学校への進学というのは、その当時は難しかったんでしょうか。

はい。もう一言で言えば、難しいほうでした。

その難しいというのは、あなたが韓国人であつたということと関係あります

かね。

はい、それもあります。あのときは、韓国人が進学するというのは、本当に難しいことでありました。

関西工学校では建築を学んだということですが、建築を勉強しようと思われたのは、どのような経緯からでしょうか。

ちょうどそのとき、韓国の方でもそうでしたが、日本に来てみたら、建築とか建物のほうが盛んであったもので、それで、父の方からも、これからは建築を学んだら、将来のため、おまえのためにもいいと、そう言われて建築をやるようになりました。

これからの社会で役に立つということで、お父さんに勧められたということですね。

はい。

日本大学の法学部にその後入学をされたのはなぜでしょうか。

建築のほうを学んでいましたけど、日本大学の、そのとき、東京へ行ったときに、知り合いの人が、建築よりも、国へ帰ったら、法律のほうへ向かったほうがいいじゃないかと、そう勧められて、私も法学のほうへ行くようになりました。

友人に勧められたということですが、あなたとしては、法律を学んで、将来どうしようというふうに考えておられましたか。

そのときの希望は、国へ帰って、弁護士とか、又は検事とか、そういったのを私は望んでいました。

それも、あなたが父親の期待を受けて、長男として家をもり立てていこうという気持ちからですか。

はい。

しかし、1944年4月に入学をして、5月にすぐに退学をされているんですが、それはどのような理由からでしょうか。

ちょうどあのときは、戦争のまっただ中で、韓国のほうでは、家柄を継ぐというのが、本当に大事な風俗になっています。それで、私が、あのとき、長男で、また、日本のほうでは、第一番に私が徴兵検査にかけられて、出征しなければならない、その状態なんで、父が、帰ってこい。そして、おまえ、結婚しろ。そして、子供を産んで、家柄を継げないかないと。帰ってこいと言われて、仕方なく帰るようになりました。

あなたが、日本軍に徴兵されるかもしれないということが間近に迫って、お父さんが、そのように、韓国に早く帰って、結婚しろというふうに言われたということですね。

はい。

あなたの普通学校時代のことをこれから聞いていきます。あなたは、入学時には普通学校ですが、卒業時には、その当時小学校というふうに改称されていたんですね。

はい。

入学は1931年ごろ、卒業は1936年ごろということになりますね。

はい。

普通学校では、日本語の使用というものを強制されましたか。

そうです。あのときは、日本語でありながらも、国語といって教えられました。

ふだん、学校でしゃべるときも、日本語を使えと言われていたわけですね。

はい。学校のほうでは、絶対朝鮮語を使うことができませんでした。もしうっかり韓国語を使ってしまったりすると、どのようなことになるんでしょうか。

そのときは罰せられます。先生からどなられたり、又は殴られたり、それから、教室の隅っこに2時間も3時間も立たせられたり、そうい

った罰がありました。

そのようにして、日本語をふだん使うことから強制され、日本語は、授業でも、今、国語というふうに言われましたが、重視して教えられていたんですかね。

はい、そうです。

学校の授業で、国語以外にも特に力を入れて教えられていた科目は何でしょうか。

主に国語、歴史、それから、修身とか、そういったのに主に力を入れてられて教えられました。

修身と今言われましたが、この修身という科目では、どのようなことを教えられたのでしょうか。

主に、日本のほうで偉い方のことを話せられて、主に、二宮尊徳とか、それから、楠正成、東郷平八郎、そういった偉い方のことを話されて、それを修身として学んだことがあります。

今名前の挙がりました楠正成は、天皇家に忠誠を誓った。

はい。

また、東郷平八郎は偉大な武勲を立てた人間という形で教えられたんでしょうかね。

はい、そうです。

学校で、クラスみんなで、神社に参拝をするというようなことはありましたか。

はい。祭日とか記念日には必ず神社参拝がありました。

祭日、記念日に学校で神社に参拝に行くと。

はい。

ちょっと、あなたが行かれた神社の名前ですね、覚えていらっしゃるでしょうか。

クワンジュ（光州）には、主に、クワンジュ（光州）市内をながめるような高い山があります。そこに神社が建てられて、クワンジュ（光州）神社というのがありました。

クワンジュ（光州）神社という神社が、小高い山の上に建てられていたということですね。

はい。

韓国語の授業ですね、これは学校ではあったんでしょうか。

ありませんでした。あっても、3年ごろで取締りでなくなったんです。3年生のころまではあったが、それ以後はなくなってしまったということですね。

はい。

学校で、校長先生が教育勅語をうやうやしく朗読するのを聞かれたということですが、そういうこともあったんですかね。

はい、ありました。

朝の会、朝会と当時は言ったんですね。

はい。

朝会で、東のほうを仰いで、遙拝するということが行われましたか。

はい。

それは、東のほうに天皇の皇居があるから、そちらのほうをお参りしなさいということだったんですね。

はい、そうです。

朝会というのは毎日あるのですか。

それは毎日ありました。

毎日そのような、いわゆる宮城遙拝というんですね。

はい。

宮城遙拝が強制されていたということですかね。

はい。

ところで、普通学校時代に、韓国人のチャン（張）先生という方の授業を覚えていらっしゃるということですが、チャン（張）先生の授業というのは、どのような授業だったんでしょうか。

チャン（張）先生もやっぱりそのときは、いろいろの授業がありましたが、そのとき、チャン（張）先生のことは、今でも覚えていますけれど、ひそかに韓国の歴史をちょこちょこ教えてくれました。

ひそかにと今言われましたが、先生が韓国の歴史を教えるとき、何か気を遣いながら教えていたんでしょうかね。

あのときは、既に日本語以外は使えない、そのときだったもので、私たちに韓国の歴史を教えるときは、日本の先生が来るか、又は校長先生が来るかと探りながら教えてくれました。

廊下のほうを見ながら、細心の注意を払って教えていたということですね。

はい。

チャン（張）先生が教えてくれた韓国の歴史、それは、具体的にどのような事柄でしたか。特に覚えていらっしゃることを教えていただけますかね。

はい。あのとき、韓国のほうで日本と併合されたときの状況、特にミンピ（閔妃）の殺害されたこと、それから、日本のほうで、強制的に韓国を併合するのに、そういうことをしたと、そういったことを教えてくれて、そのとき、先生の行動は、ものすごく興奮していました。そして、たまには、こういった状態になったのは、おまえたちのお母さん、お父さんが皆ばかものだったからこんなになったって、そういったことまで言われました。

チャン（張）先生が特に教えてくれたのは、韓国併合の前後、日本人の残虐行為、ミンピ（閔妃）殺害など含めて、そういった歴史を興奮して教えてくださったということですね。

はい。

チャン（張）先生が、なぜそこまでして韓国の歴史を教えるのか、その当時、あなたはその理由が分かりましたか。

本当のことはそのときは、私はげげんな思いをしました。そのときは、どうしたかといったら、ずうっと日本の教育を幼いときから教えてもらったもので、今になって、どうしてあんなことを言うかなと、そして、余り関心は深く持つようなことはありませんでした。

その後になって、現在になって考えてみると、そのチャン（張）先生の授業というものの大切さというものは分かったということでしょうかね。

はい、そうです。

ところで、日本に対する反日、抗日の活動をしていた人というのは、あなたはその当時御存じでしたか。

はい。

それはどのような人たちでしょうか。

クワンジュ（光州）にある農業学校卒業の人たち、また、そこに通っている人たち、その生徒たちが、そのとき、年がちょうど、うさぎ年なんで、ラビットクラブというのを作って、抗日のほうに、自分たちが団体を作って、たまに集まって、そのことを言ってることを知っていました。

今言われたのは、クワンジュ（光州）農業学校の学生たちで、ラビットクラブという組織があったのを知っているということですね。

はい。

彼らは、その後、そういった活動をして、逮捕されたんでしょうか。

はい。逮捕されたのは見たことはありませんけど、聞いたことがあります。

あなたが知っている限り、その後彼らはどうなっちゃったんですかね。

その中の一人の人が、私の知り合いの人が、警察のほうへ引っ張られていって、ひどい目に遭って、そこで、出てきた後は、ものすごい病気を患って、病院に通っているのを、私はそのとき見ました。

そのラビットクラブの人たちと、あなたは知り合いだったんですかね。

はい、知り合いでした。

あなた自身は、そのラビットクラブの活動をしたりということはなかったんでしょうか。

はい、それはありませんでした。

あなたよりも少し年齢が高い方々なんですね。

そうです。少なくとも3歳、4歳上の人です。

そういった人たちがやっているの、知り合いとして知っていたということですね。

はい。

1940年に、朝鮮総督府によって創氏改名が強制されましたが、そのとき、あなたも日本名に変えさせられたんでしょうか。

はい。

あなたのお名前は何となりましたか。

そのときの名前は、光澤廣といって、そうになりました。

妹さん、キム・スンニエ（金淳禮）さんは、何という名前にさせられたんでしょうか。

やっぱり姓は同じく光澤で、名前は禮子って、そうになりました。

ところで、この光澤という名字ですが、なぜ光澤という名字になったんでしょうか。そのことをあなたはお父さんから聞いていらっしゃるんですか。

はい、聞いていました。

どのような理由で光澤という名字を付けたというふうに聞いていますか。

韓国のほうでは、族譜（ぞくふ）というのが、その家柄をずうっと続

く帳簿があるんです。その中に、祖先の方でホ（号）というのがありますが、そのホにクワンテク（光澤）というのがあります。そのホに従って、光澤という改名をしたと、そう言われました。

今言われた族譜（ぞくふ）というのは、韓国語でチョクポといって、家族の「族」に系譜の「譜」という字を書きますね。

はい。

そのチョクポ（族譜）の中に、これは、ホと言われましたが、号（ごう）ということですね。

はい。

ホ（号）がクワンテクというのは、「光」という字に、「澤」という字を書いて、それを韓国語で読むとクワンテクと。

はい。

要するに、その号（ごう）としてチョクポ（族譜）に記載されていたものを利用したと、こういうことですね。

はい。

ところで、創氏改名のときに、チョクポ（族譜）の中のホ（号）によって、つまりあなたのように、号（ごう）によって氏（うじ）を決める、このようなことはよく行われていたことでしょうか。

そうです。主にそういった傾向で改名をしたと思います。

あえてお聞きしますが、通常、創氏改名時に、日本の、日本名の氏を決めるときに用いられた方法というのは、あなたが知っている限り、よく用いられた方法というのは、どのような方法がありますか。

戸籍に、段を見ると「本」というのが書いてあります。で、同じキム（金）でも、その本が金海（きんかい）とか、それから、光山（みつやま）とか、そういった本に従って改名する人が多くありました。

甲H第13号証の2を示す

これは、現在のあなたの戸籍謄本ですが、この「戸主」「金中坤」(キム・チュンゴン)」さんという、「金中坤」(キム・チュンゴン)の右上辺りに、書籍の「本」という字ですね、本当の「本」という字が書いてあって、その下に「金海」というふうに書いてありますね。

はい。

この「本」というのが、今あなたの言われた本ですね。

そうです。

正しくは、本貫(ほんがん)と書くんですね。

はい、そうです。本貫です。

これは、いわゆる出身地を示すものなんですね。

はい、主に出身地です。

こういうものが韓国の戸籍にあって、この本を利用して、例えば、金海(かなうみ)さんとか、そういうふうな名前にすることが多かったということは今あなたは言われたんですね。

はい、そうです。

で、チョクポ(族譜)の中のこういった、チョクポ(族譜)というのは家系を示すものとして非常に重要なもの、チョクポ(族譜)の中のホ(号)によって氏を決めるということもあったけれども、例としてはそれほど多いほうではなかったんでしょうか。

はい。それほど多くありませんでした。主にそういった傾向があったことはあったんです。

そういう傾向もあったし、いろいろ決め方はあったけれども、あなたのお父さんは、このチョクポ(族譜)のホ(号)を利用して氏を決めたということですね。

はい。

お父さんが、そのようにチョクポ(族譜)のホ(号)を利用して氏を決めた

のはなぜだと思いますか。

やっぱり自分の先祖を重んじて、その先祖に従うがためにそうしたんじゃないかと思います。

創氏改名には従う一方で、そうしたチョクポ（族譜）というものを大切にしておいて氏を決めるということについては、それは、どのような理由からだというふうに思いますか。

先ほど申しましたように、自分のその元というのを重んずるのに、そうしたんじゃないかと思うんです。

少なくともその限度では、自分たちの家族の流れというものを尊重しようとしたということですかね。

はい。

甲H第11号証の1を示す

ところで、これは、その当時のあなたの戸籍、あなたのお父さんの、現在では除籍ということになりますね。

はい。

甲H第11号証の1の2枚目を見てください。この真ん中に「廣」と書かれていて、「中坤」（チュンゴン）というふうになっている。これがあなたの戸籍の記載部分ですね。

はい。

甲H第11号証の1の3枚目を見てください。この一番右側の戸籍部分の記載、「禮子」となっていますが、これが、あなたの妹さん、キム・スンニエ（金淳禮）さんの戸籍の記載部分ですね。

そうです。

妹さんの死亡のことについては、後で詳しくお聞きしていきますが、ここであらかじめ確認しておきます。この妹さんの戸籍の記載部分の上の段の最後の2行のところを見ますと、「昭和拾九年拾貳月七日午後壹時四拾分名古屋

市南區豊田町字道德西ノ割二千九百二十三番地三菱重工業株式會社名古屋航空機製作所道德工場ニ於テ死亡」と記載されていますね。

はい。

それでは、これから勤労挺身隊の動員の事情、あなたの妹さんほかの勤労挺身隊への動員の事情についてお聞きしていきます。妹さんたちが勤労挺身隊へ勧誘を受けたということを、あなたはいつごろ、どのようにして知りましたか。

ちょうどそのとき、年代ははっきり知りませんが、私が、父から呼ばれて、韓国へ帰ってから、父と母に、そういうことがあるということを知り、そのとき知るようになりました。

あなたが、日本大学法学部をやめて、韓国へ帰ったころ、1944年5月ごろですかね。

はい。

一に、既に妹さんたちが勧誘を受けていて、御両親からその話を聞いたということですね。

はい。

御両親からは、妹さんたちはどのようにして勧誘されたのか、だれから勧誘されたのかということについて聞いておられますか。

はい。あのとき、私の母に聞きました。そういったことはだれが言ってくれたかと言ったら、あのときは、戦争中で、隣組というのが組織されて、それを、そのときは愛国班と言っていました。その班長さんが来て、そういつて、そこで、名古屋へ行ったらいいから、娘をよこすほうがいいじゃないかと、そう言われたというふうに聞きました。

愛国班、これが隣組のことですね。

はい。

一の、班長から勧誘されたと。どのように言つて、妹さんたちは誘われたん

でしょうか。

その、班長さんが来て、ここではどうしてもおまえたちは、あの子たちに女学校へ行かすというのは難しいから、そこの、日本から来た話によると、そこへ行ったら女学校に行ける、そして、給料ももらえる、特にそのとき、女学校は少なくとも4年生じゃないと卒業できないのが、2年余りそこで一生懸命やとったら、女学校の資格ももらえる、だから、そういったふうにして誘ったということです。

というふうに聞いたわけですね。

はい。

妹さんと一緒に誘われたのが、後にあなたの奥さんとなる、キム・ポンニエ（金福禮）さんですね。

はい。

二人はどのような関係でしたか。

隣近所に住んでいたもんで、とても親しい仲でありました。

ところで、妹さん、キム・ポンニエ（金福禮）さんらが勧誘を受けたとき、彼女たちは国民学校生でしたか。

いえ、卒業したばかりの子供です。

卒業したばかりで、家の手伝いなどしているころということですね。

はい。

幼い二人が日本へ行くということについて、あなたの御両親は、どのように思ったんでしょうか。

私が、どうするかと聞いたら、それは大反対でした。おまけに、国民学校を卒業した小さい子供たちを、よその国まで行かすというのは、どうしてもできないと、そう言って、私のほうにも、私がそう言われたんです。

幼い子供をよその国、外国へ行かせるのは不安であるということですね。

はい。

それは、女の子だからという点もあったんでしょうかね。

そうです。

結局、二人とも日本に行くようになってしまったのは、これはなぜでしょうか。

父母、兄弟は、駄目だけど、自分たちはやっぱり学びたいという、その一心で、日本のほうで、来た人たちのことを信用して、もうちょっと勉強したい、その心持ちで行ったと思います。

勉強をしたいという動機が非常に強かったと思われるということですね。

はい。

韓国人が女学校へ進学するというのは、その当時非常に困難なことだったんでしょうか。

はい、本当にまれなことですね。

あなたは、名古屋まで、妹さんたちが動員されるとき、一緒に来たということなんですが、そのことについて、あと聞いていきますね。

はい。

なぜ、名古屋まで一緒に来ようとしたんでしょうか。

父母もそう言ってましたけど、私自身も、あのときは、一人の妹だったもんで、そして、妹だけ行かすというのは、ちょっと不安な気持ちがありました。それで、私は、日本で暮らした経験もあるし、それで、私が一緒に行くようになりました。

行き先は事前に知らされていたんでしょうか。

そのときは、どこへ・・・日本ということは知っていましたが、確実な行き先は分かりませんでした。

あなたが一緒に付いていくというのは、行き先の確認という意味もあったんですね。

はい、それもありました。

妹さんたちが、結局1944年6月、日本へ動員されることになりますが、まず、クワンジュ（光州）市庁舎に集合させられたんですね。

はい、そうです。

その後の名古屋までの行程を、ちょっと簡単にお話しいただけますか。

はい。

まず、クワンジュ（光州）市庁舎に集合、その後。

集合して、隊列を組んで、クワンジュ（光州）の市内を行進したと思います。行進して駅へ向かって、駅から汽車に乗って、韓国の南端にある、ヨス（麗水）という港があります。そこで船に乗って、下関へ向かって、下関から汽車で名古屋へ来たと思っています。

あなたは、行き先がどこかというのを、その途中で知ったんですね。

はい。

どこで、どのようにして知りましたか。

船の中で、ちょうどそのとき、日本から来た人に聞きました。そうすると、名古屋だということをそのとき聞きました。

日本から来ていた、同行していた日本人男性に、あなたが尋ねたんですね。

はい、聞きました。

で、名古屋という町の名前だけ教えてもらったということですね。

はい。

名古屋三菱重工の道徳工場であるということは、これは、そのときに聞かされー。

知りませんでした。

なかったんですね。

はい。

三菱の工場ということは、どの地点で分かったのでしょうか。

あのときは、三菱の寮というところへ着いて、ああ、ここだったなということが分かりました。

三菱の寮に着いて、初めて、三菱の工場であるということが分かったわけですね。

はい。

ところで、その行き先ですが、動員されていた少女たちには知らされていたんでしょうか。事前でなくても、その来る途中とかにも。知らされたんでしょうかね。

全然知っていませんでした。

あなたが特別に聞き出して、初めて名古屋という名前だけが、あなたが聞き出していたということですね。

はい。

そのとき、動員される途中の少女たちの様子ですが、どのような様子でしたか。不安な様子はありませんでしたか。

別に、不安という様子はありませんでした。ただ、自分たちは、話し方を聞いていたら、ああ、自分がそこへ行ったら勉強したらいいなという、そのことも言っていました。

ところで、同行した韓国人男性というのは、あなた以外にいましたか。

いません。

あなた一人ということですね。

はい。

寮に着いて、山添さんという人に会いましたか。

はい、会いました。

山添さんというのは、どのような人でしょうか。

山添さんは、その寮の寮長ということを知りました。

寮長さんということですね。

はい。

ところで、その寮ですが、建物の様子はどんな様子でしたか。

あのとき、2階建てで、長屋みたいな建物でありました。

少女たちが寮に着きます。少女たちのどんな様子について覚えていますか、寮に着いて何をしていたか。

寮に着いたら、そこで、なにか、人数の隊を成立するのに、隊を組んだり、また、部屋割りをしたり、そして、それと、そこへ入って、何か注意事項、そういったことをやっているのを見ました。

隊というのは、中隊とか小隊とか、軍隊式に、その名前で組織して、班割りをしているということですね。

はい。

で、それに従って部屋割りをしたりする。

はい。

それは、山添さんが指示を出していたんでしょうか。

そうです。

あなたは、そのとき寮に宿泊したんですね。

はい。

そのときは1泊だけでしょうか。

そうです。

それで翌日あなたは寮を去る。で、その寮を去るときですね、妹たちに何か不安を感じたことはありませんか。

別に、それは感じたことはありませんでしたが、私は妹たちに、こう言いました。「しっかり頑張れよ。」と。

「しっかり頑張れよ。」と言うほかに、何か言いましたか。

はい。ここは三菱という会社だったら、大きい会社でもあるし、信用できる会社だから、しっかり頑張って、うまくやってくれと、そう言

って、そこを去りました。

三菱と聞いて、これは大きな会社だし、信頼できると、あなた自身も思ってしまったんですかね。

はい、そうです。

その後、二、三か月して、あなたは、もう一度名古屋に行く機会があったんですね。

はい。

二、三か月後に、もう一度名古屋に来たのはどのような理由からですか。

ちょうどそのとき、私は日本にいたとき、馬術を一生懸命習いました。それで、馬乗りのために、韓国へ帰っても、クワンジュ（光州）というところに、騎馬警察隊というのがあって、そこに加わって、一緒に馬に乗っていましたが、韓国のほうでは、馬具を購入することができないもので、私が、その馬具を購入するために大阪へ行くついでに、名古屋へ寄ったのであります。

馬具を購入しに大阪へ来たので、そのついでに名古屋まで足を延ばして、妹たちに会いに行ったということですかね。

はい。

このときも寮に行ったんですよね。

はい。

妹さんたちにそのときに寮で会ったんですかね。

はい、寮で会いました。

会ったのは、妹さんと、その親友のキム・ポンニエ（金福禮）さんの二人ですか。

はい。

せっかく来たんだから、ちょっと外でごちそうでもというようなこともしたかったですかね。

ありました。で、ちょうどそのとき、市内をずうっと回ってみたら、あ那时候は、食料不足で本当に困っていたときです。それで、店で、みつ豆とかそういったのを売っていましたんで、妹とか、キム・ポンニエ（金福禮）と一緒に連れ出して、そこで、一緒にごちそうでもしてあげようかと思って、寮長に話しました。話したところ、断られたです。

駄目だと言われたわけですね。

はい。

それで、寮で話をしたんですね。

はい。

妹さんたちから、仕事について何か聞きましたか。

はい、聞きました。

どのようなことを聞きましたか。

おまえ、どんな仕事をしているかと聞いたら、妹は、機体にペンキを塗っていると。それで、私の妻になったポンニエ（福禮）は、機体のところに、布で何か、針なんかでそれを布を縫っていると、そういったことを聞きました。

縫い物をしていると。

はい。縫い物。

勉強については何か聞きましたか。

いや、そのとき、勉強はまだしてないと聞きました。

勉強はないと。

はい。

で、勉強するために来たんだからということで、妹さんたちは、勉強がないことを不満に思っていないませんでしたか。

ちょっとそういった気配がありましたけど、私は、今来たばかりで、

まだ準備ができていないだろうと、いずれかは勉強あるだろうと、そのときまでおまえたちは待ったたら、必ずするよと、で、もっと頑張れと、そう言っては私は帰りました。

いずれあるからと、励ましてあげたわけですね。

はい。

日常生活について、何かそのとき聞いたことはありませんか。

日常生活に、私の妻になったポンニエ（福禮）は、飯が足りないと言
って、そして、そういったことを言っていました。

御飯が足りないということで、何かポンニエ（福禮）さんがした話があった
わけですか。

はい。そのときは、それで、自分が列を組んで飯をもらうようになって
いるんだけど、足りなかったもので、もう一度もらおうと思って、
もう一回繰り返して後ろに立っておって、見付かって、ひどい目に遭
わされたと言わされました。

1 回しか食事を取りに行っちゃいかんということだったんですね。

はい。

それを2回並んだと。それを、逆に、あなたのほうは、そんなことをしちや
いかんと。「真面目に頑張れ。」というふうに、その話を聞いて、言っちゃ
ったということですね。

はい。

甲H第17号証の1を示す

これは、あなたの奥さんでありますキム・ポンニエ（金福禮）さんの陳述書
ですね。

はい。

キム・ポンニエ（金福禮）さんの死が近いということで、連絡を受けて、キ
ム・ポンニエ（金福禮）さんからの聞き取り内容を弁護団が急きよまとめて、

あなたを通じて、病床にあったポンニエ（福禮）さんに確認をしてもらったという経緯で作成されたものですね。

そうです。

この陳述書の内容は、2000年3月24日、25日にクワンジュ（光州）のホテルで、私、ほか、藤井弁護士、若松弁護士、宮田弁護士ら弁護団が、あなたたち夫婦と直接会って話を聞いた、そのときの聞き取り内容、直接の聞き取り内容というのが中心になっていますね。

はい、そうです。

この陳述書によると、隣組組長に、「一日仕事をすれば2、3日は勉強をする、」などと言われ、勉強したくて応募をした、友人が風邪を引いたときに、お湯を持ち出したのを見付かって、平手で倒れるほどに殴られたことがある、厳しい監視のもとで、妹さんはペンキ塗り、キム・ポンニエ（金福禮）さんはパイプに布を縫い付ける労働をさせられたというようなことが書かれていますね。

はい。

そうすると、実際には、とても厳しい状況に置かれていたようなんですが、あなたが、動員後二、三か月してから名古屋に行ったときに、そのような厳しい状況というのは感じたことはありませんか。

ちょっとそのとき、私は感じたことがあります。余り厳しい、何ですか、その行動、それが、朝早く起こされて、点呼をしたり、また、一つ一つが軍隊式にやっているのを見て、ちょっと厳しいなど、そういう思いをしました。

具体的な内容について、例えば、あなたが妹さんたちに会ったのは、時間にして1時間ぐらいですか。

まあ行って話す間は1時間ぐらい、そのくらいです。

1時間ぐらい。

はい。

その話の中では、ここに書かれているほどの厳しい事情というもののまで聞き取ることができなかったんですね。

そうです。

その後、妹さんについてお尋ねしていきますが、妹さんが、1944年12月7日の地震で亡くなったということですが、その死亡の通知というのは、いつごろ、どのようにして届いたものなんでしょうか。

また、年代は私ははっきり分かりません。

その地震の後しばらくしてくらいですかね。

はい。地震の後、私がちょうど、私は馬が好きなので、馬に乗って、それから家へ帰ったときに、クワンジュ（光州）の市庁からそういった通知があつて知るようになったということで、そのとき、私は馬から降りて家の中に入ると、母が言ってました。おまえの妹が死んだっていうのに、おまえは馬ばかり乗って歩くと。そして、妹は死んだよって。で、初めてそのとき知るようになりました。

クワンジュ（光州）の市庁、要するに、市役所ですね。

はい。

役所から通知が届いていたと。

（うなずく）

その通知のその話を聞いて、妹さんが亡くなったという話を聞いて、あなたはどのように感じましたか。

まさかと、そういった思いでした。行つたばかりなのに、どんなにして死んだかなと。それを、もう一度私が確かめるために市庁へ行きました。そういつて確かめてみたら、そういったことがあると、そう言われました。

クワンジュ（光州）の市庁舎に出向いて行って、事情を聞いたわけですね。

はい。

そういう通知がありますよということですね。

はい。

詳しい事情などについて、クワンジュ（光州）の市庁舎では分かりますかね。

いえ、それを聞きましたけど、自分たちは詳しいことは分らないと、
そういつて言われました。

詳しい事情は分らんというふうにクワンジュ（光州）市庁舎で言われて、
それで、あなたはどうしましたか。

それが本当なら、私は、遺骨でももらいに行かにかいかないと思って、
日本行きを決めて、母に頼んで、旅費をもらって、日本へ向かいまし
た。

それで、あなたが三たび名古屋に来るということになったわけですね。

はい。

名古屋に来てみて、地震後の名古屋市内というのは、どのような状態になっ
ていましたか。

あのとき、相当壊れた家なんかを見るようになって、ああ、これはす
ごい地震があったなということを、それで感付きました。

キム・ポンニエ（金福禮）さんに会いましたか。

はい、そのとき会いました。

キム・ポンニエ（金福禮）さんの様子は、どのような様子だったでしょうか。

あのとき、初めて寮に行ったとき、ポンニエ（福禮）が出てきて、い
きなり私に、「兄さん、死んだですよ。」って、あなたの妹は死にま
したって、泣きついてきました。

そのとき、妹さんの遺骨というのはどうなっていましたでしょうか。

そのとき、後になって聞いたら、私に来る前に、韓国へ送ったって聞
きました。

そのとき、名古屋へ来られたとき、道德工場のほうへは行きましたか。

はい。死んだ場所でも確かめるために、一度行ってみました。

工場はどのような様子だったのでしょうか。御記憶にあることをお話しください。

初めに、正門に入ったときのほうは、余り崩れてなかったですね。それで、その、死んだという場所に行ったときは、そこは相当随分崩れて、垣根なんか崩れていました。それで、それを片づけている人を見付けました。

あなたが今垣根と言われたのは壁ですね。

はい。

壁も全部壊れていたという状態ですね。

はい。

正門の近くの建物は倒れてはいなかった？

はい。

工場自体は倒壊して、完全に倒壊していたということですね。

はい。

妹さんが亡くなったときの様子ですが、具体的な様子ですね、それは、キム・ポンニエ（金福禮）さんから、結婚後にあなたは聞くことになったんですね。

はい。

具体的にどのような状況で亡くなったんでしょうか。

そのとき、ちょうど昼のとき、昼飯を食べて、仕事に取りかかろうとしたときに、そこにある組長さんというのが、「地震だ、逃げろ。」って、そう言われたんですね。それで、そのとき、私の妻になったポンニエ（福禮）は、地震に経験がないもので、ちょっと迷っておったと。それで、とにかく逃げろと言われて、門のところへ駆けつけよう

と思ったら、門が既に壊れていたんですね。で、仕方なく、その機械台の下に伏せていたというんですね。そして、ちょっと横を見たら、そのときに、私の妹が廊下を走ってきたのを見たと言うんです。で、走ってくるとたんに、壁が崩れて、そこで下敷きになってしまったと、そう言われました。

通路を走って逃げてくる妹さんに、壁が倒れかかってくる様子を見たということを知ったわけですね。

はい。

先ほどのポンニエ（福禮）さんの陳述書に書かれているとおりということですね。

はい。

先ほどのキム・ポンニエ（金福禮）さんの陳述書、甲H第17号証の1には、その後、地震の後のことについて、「地震後、私は自力で脱出しました。すぐに第一中隊で点呼して数えると6名がいません。みんなで探しました。金淳禮を見つけたとき、金淳禮は、うつぶせになったまま、堅いレンガが頭に当たって、頭から血が流れていました。」というくだりがありますね。

はい。

このことを聞いて、あなたはどう感じましたでしょうか。

本当に・・・かわいそうに、どうしてそんなになったかねって、私は本当に心から強く嘆きました。

キム・ポンニエ（金福禮）さんは、この、妹さんが亡くなられるときの様子、又は妹さんを発見したときの様子というのを、あなたにだけ話をしたんでしょうかね。

後になって、私が聞いたんだけど、私の父母にはどうしてもそれが話せなかったと。で、なぜかっていったら、もしか自分がそのことを直接話したら、父母の嘆きが激しいだろうと。それで、父母には話せな

かったというように・・・。

韓国というのは、日本と違って、地震がない国ですね。

はい。

妹さんやポンニエ（福禮）さんには地震の経験があったでしょうかね。

全然ありません。

対処の仕方も分かってはなかったと思われませんか。

はい。

あなたには、日本留学経験がありますが、日本で地震を、小さな地震とか経験したことはありましたか。

ありました。

ところで、あなた自身、その当時、日本で学校に通っているとき、地震の訓練ですね、地震の訓練などは受けたことがありましたか。

ありません。

ところで、山添寮長さんは、妹さんが亡くなったということに対して、あなたに、そのとき、名古屋へ行かれたとき、何と言ったでしょうか。

相当なぐさめの言葉を私に言ってくれました。本当に思いがけないことで、どうしようもないと。で、それに対して、慰労の言葉をくれました。

そのときあなたは、名古屋に来て寮に2泊されたんですかね。

はい。

このときにあなたは空襲に遭っていますね。

はい。

そのときの様子をちょっと聞かせていただきたいんですが、それは、昼ですか。夜ですか。

夜でした。

夜、警戒警報から空襲警報、そういうのが聞こえたわけですかね。

はい。ちょうどあのとき、寝ようとしたら、サイレンが鳴って、警戒警報、ちょっとしたらまた、空襲警報がありました。それで、「みんな防空壕の中へ入れ。」と、そう言われて、私も、少女たちと一緒に防空壕の中へ入りました。それで、そこで退避したんです。

防空壕の中には何人ぐらいが入りましたですか。

約10人余りの少女たちがいました。

10人余りの少女たちと一緒に防空壕に避難をしたと。

はい。

防空壕の中から、爆弾の投下される音も聞こえていましたか。

はい。投下される、爆弾の落ちる、ヒューとした、その音、又は爆発するその音、それがはっきりと聞こえました。

防空壕の中の少女たちの様子について、印象に残ったことがありますか。

はい、あります。

どのようなことでしょうか。

あんな激しい爆撃の中にも、その中でも、いびきをかいて寝ておる少女たちがいました。それで、私が、どうしてこんな激しい爆撃の中に、命が惜しい、危ないというときに、こんなに寝るかなあと、そう思った思いをしたこともあります。

それほど少女たちの労働による疲労、そういうものが激しかったということですかね。

はい、そうです。

あなたは、1945年の5月ごろに日本軍に徴兵されたんですね。

はい。

配属された部隊は、何という部隊でしょうか。

韓国のプサン（釜山）というところに駐屯していた高射砲大隊で、そのときの番号は、7420（ななよんにまる）部隊というところに配

属されました。

いつ来るか分からないという状況で、ついに徴兵の召集令状が来て、そちらに配属をされ、その軍隊の待遇の中で一番記憶にあることというのは、どのようなことでしょうか。

私が入隊した軍隊は、やっぱり日本の方が多かったです。それで、上級の人も皆日本の方で、やっぱり軍隊だけにあって、厳しい規律の下で訓練を受けました。

今、上級の方というのは、将校や下士官一。

はい、そうです。

一が、すべて日本人ということの、日本人ということですね。

はい。

で、韓国人で徴兵された者に対しては、特に厳しかったんでしょうかね。

そうです。

それは、殴る、蹴るを含めた待遇ということですね。

それは、軍隊のほうは、もうそれはひどいことありました。

あなた自身も殴られたこともありますか。

数回あります。

1945年8月15日、日本の敗戦と韓国の解放を迎えたのも、その部隊のあったプサン（釜山）ですか。

はい。

敗戦直後の日本軍の様子を、あなたは見ておられますね。

はい。

敗戦直後の日本軍の様子の中で、特に印象に残っている、記憶に残っていることというのは、どういうことがあるのでしょうか。

ちょうどあのとき、敗戦は8月15日だったですかね。

はい。

そう思うんだけど、敗戦後、部隊長がみんなを集めて、「日本は負けた。」、そういうことを話してくれました。それで、そのとき、主に若い将校の、見習い将校なんかいましたけど、ピストルで自分の頭を撃って、自殺した人がいました。それで、後になって、ずうっと、これを、大事な書類とか、アメリカ軍が侵入してきたら、それを見せられないというものは、みんな焼却にかかったということを記憶しています。

焼却というのは、書類や軍服も焼却というようなことだったんですね。

はい。

あなた自身が、書類の焼却について軍の指示を受けましたか。

はい。

どのような指示だったのでしょうか。

その内容は私は全然知りません。1，2等兵に、その内容まで知らすわけはないと思います。

その書類の内容ですね。

はい。

書類の内容は、一体何についての書類かは分からないけれども、あなた自身も、焼却するように指示を受けて、その焼却作業に従事をしたということですね。

はい。

それで、あなたはクワンジュ（光州）に帰ることになりますね。

はい。

8月15日からどのくらいしてクワンジュ（光州）に帰りましたか。

約2週間余りして帰るようになりました。

クワンジュ（光州）のほうには、キム・ポンニエ（金福禮）さんも、その後、に帰ってきましたか。

私が帰った後。その当時は帰ってきていませんでした。
しばらくして帰ってきたんですね。

はい。

どのくらいしてから帰ってきたか、大体で結構です。

大体一月ぐらいか、それだけ・・・はっきり分かりません。

キム・ポンニエ（金福禮）さんが帰ってきて、あなたの御実家にもポンニエ（福禮）さんは来ましたか。

はい。

それは、妹さんの死亡を御両親に報告するということがあったんでしょうかね。

そうです。

キム・ポンニエ（金福禮）さんの報告を聞いて、あなたの御両親はどのような様子だったのでしょうか。

それは、今でも、話したら、私は胸が痛いです。母は、崩れるほど悲しい思いで、泣いていました。

お父さんは？

お父さんは、ただ、口をすくんでいて、涙だけ、ぼろぼろ流しているのを見ました。

第2次提訴の訴状添付の相続関係図を示す

この図面は、あなたのお父さん、お母さん、そして、御兄弟の図面ですね。

はい。

これによると、四男四女ということになりますが、長女、次女の方はもう早くに死亡、三女の方も1942年の8月に亡くなっていて、で、勤労挺身隊に動員された当時、既にこの四女のスンニエ（淳禮）さん、娘さんはスンニエ（淳禮）さん一人だったということですね。

はい。

あなたが長男で、4番目の子供ということですね。

はい。

甲H第32号証の写真①を示す

上の写真ですが、これはあなたの家族写真ですね。

そうです。

まず、御両親、お父さんはどちらですかね。

真ん中に、マントを着てる男の人です。

お母さんはどちらですかね。

向かって右側にいる。

向かって右側、お父さんの右側ですね。

はい。

あなたはどれですか。

私は、一番左側にある帽子をかぶった、それが私です。

帽子をかぶった少年ですね。

はい。

妹さんのキム・スンニエ（金淳禮）さんはどちらでしょうか。

お父さんの左側に立っている娘です。

お父さんの左斜め下に立っているこの少女が、キム・スンニエ（金淳禮）さんということですね。

はい。

先ほどの相続関係図からも明らかなように、女の子4人のうちの3人までが亡くなっていた上で、一人娘になっていた。それで、その一人娘までも地震で死亡した。で、このことで、御両親の悲しみというのはひととき大きかったんでしょかね。

そうです。

あなた自身も、御両親と同じような思いだったですかね。

そうです。

甲H第33号証を示す

これは、あなたたち御夫婦が、NHKの取材を受けたときの内容を文章に写したのですが、この中でも、妹さんの話に及ぶと、あなたの目に涙がにじんでおられます。今でも、妹さんの死について、その悲しみがよみがえるということは度々ありますか。

はい、あります。ただいま、法廷の中で私が証言するこの瞬間も、悲しみはにじんで、今述べながら流しています。

それほど家族にとって、あなたにとって、この妹さんというのは、非常に大切な存在だったわけですね。

そうです。

その後のあなたの生活について、若干お聞きしていきますが、その後あなたは、韓国軍に入隊されたということですが、そのきっかけは何だったのでしょうか。

・・・もう一度言ってください。

その後のあなたの生活について聞いていきますね。その後、チュンゴン（中坤）さんは韓国軍に入隊をされましたね。

はい。

そのきっかけは何だったのでしょうか。

それで、ちょうどそのとき、韓国の青年、少年に、日本のほうから徴兵制がおかれて、私は、一番初めにそれに該当されたもんで、召集令状を持っていきました。

チュンゴン（中坤）さん、今私がお聞きしようとしているのは、日本軍の徴兵にあって、で、日本の敗戦によって韓国に戻りましたね。

はい。

クワンジュ（光州）に戻りましたね。

(うなずく)

その後の生活についてお聞きしています。

はい。

その後あなたは韓国軍に入隊をされましたね。

はい。

韓国軍に入隊をしたきっかけは何でしたか。

あのときは、ちょうど、戦争前に、チョンラナムド（全羅南道）のス
ンチョン（順天）とヨス（麗水）に、反乱軍というのが、反乱を起こ
して、で、相当あのときやかましかったもので、それを、私が、あの
ときは騎馬隊にいたもので、それを鎮圧するがために出頭しろと。そ
のとき行ってみたら、相手のほうは、相当数の者が兵器を持っていま
した。それで、私たちは馬に乗って、余り兵器がなかったもので、ち
よっとそれだけは自由にできない、比較にならなくて、そのとき、私
の友人とか隣の人に、韓国軍と一緒に入隊しようではないかと、そう
言われて、韓国軍に行くようになりました。

今、戦争と言われたのは、これは、日本では朝鮮戦争と言われますが、韓国
では6・25（ろくにご）動乱のことですね。

はい。

その前に、韓国のチョンラナムド（全羅南道）のヨス（麗水）、スンチョン
（順天）で、共産軍の反乱が起こったんですね。

はい。

その鎮圧を命ぜられた。あなたが警察隊に入隊していたころのことですね。

はい。

で、この不安定な情勢では駄目だということで、韓国軍に入隊しようじゃな
いかという友人の声もあり、それで、韓国軍に入隊されたということですね。

はい、そうです。

そこでお聞きしますが、1950年6月25日、あなたはどこにいましたか。

ちょうど、私は、軍隊で教育を受けて、配置されたのが38（さんぱち）線のすぐ下のほうにある、カンウォンド（江原道）、ウォンジュ（原州）というところがあります。そこに、第6師団の司令部の、搜索隊の第1小隊の小隊長として配置されました。

軍隊の地位は少尉ということですね。

はい。

今言われたのは、カンウォンド（江原道）のウォンジュ（原州）という町に、搜索隊の少尉として駐屯していたということですね。

はい。

1950年6月25日というのは、この日、北朝鮮軍が38度線を越えて侵攻した日ということですね。

はい。

あなたは、今、先ほど38（さんぱち）線と言われたのは、38（さんじゅうはち）度線ですね。

はい。

38度線に近いウォンジュ（原州）という町に、軍隊として駐屯していたということですね。

はい。

北朝鮮軍の突然の侵攻によって、あなたたちの軍隊はどのようなになりましたか。

あ那时的、私たちの、南の軍隊は、北の軍隊よりかずっと兵力とか、武器がよくなかったもので、それで、ずうっと後退、後退して、南のプサン（釜山）の近くまで後退しました。

搜索隊というのは、具体的にどのような役割を担う隊なんでしょうか。

搜索隊は、戦争と、戦いのあるときには、一番先頭に立って、それか

ら、敵の様子を探るんです。それで、敵の様子を探って、そこで、自分が分かったその情報を、後方の指令のほうに知らす、その役目をしています。

そのような役割の軍隊の小隊長として、この突然の出来事によって、後退を余儀なくされると。あなた自身も、正に死を経験するほどの窮地に立ったわけですね。

はい。

その後のあなたの軍隊での役割、地位ですが、ちょっと簡単にお話しいただけますか。

はい。

その後、あなたの軍隊での役割、地位はどうになりましたか。

その後、ずうっと戦いのうちに、米軍が上陸するようになって、米軍と一緒に交わって進軍するようになって、それからずうっと38（さんぱち）線の上まで攻撃していきました。

搜索隊の隊長として、その役割を果たしたということですね。

はい。

搜索隊のあと、あなたは軍隊で、位はどうになりましたか。

そのとき、陸軍大尉と進級をしたときに、韓国の軍隊では、将校になっても、一時は、また教育を受けないかないです。それで、そのとき、陸軍歩兵学校に行って教育を受けてこいと、そういう命を受けて、陸軍歩兵学校に教育のために行くようになりました。

それで、その後、戦術教官を務めて、その後は輸送部隊に移られたということですね。

はい。

1953年7月27日の休戦協定時には、あなたは、輸送部隊でプサン（釜山）に駐屯していたんですね。

そうです。

1947年の1月15日、あなたはキム・ポンニエ（金福禮）さんと結婚しておられますね。

はい。

甲H第32号証の写真②を示す

下の写真ですが、これが、あなたが結婚されたときの写真ですね。

はい。

この結婚というのは、その当時のことですが、御両親に勧められたんでしょうかね。

そうです。

どのように勧められましたか。

どうせ結婚はしないといかないけど、妹と一番親しい友達であって、また、そのとき、妹は死んで、このポンニエ（福禮）は帰ってきたもので、私の父母は、自分の娘のように思っていたもので、結婚を勧められました。

6・25（ろくにご）動乱のさなか、奥さんのキム・ポンニエ（金福禮）さんは、クワンジュ（光州）にいたんでしょうか。

はい。

クワンジュ（光州）も北朝鮮軍に占領されたと思いますが、奥さんは、その間どのような状態だったのでしょうか。

北がクワンジュ（光州）を攻めたのは、約4か月余り攻められたんです。そのときに、北のほうでは、ものすごい取調べがあって、そのとき、警察の家族とか、軍隊の家族には、ひどい尋問があったと、そう聞きました。

奥さんもその軍の尋問に耐えたということですね。

はい。数回にわたって、尋問でひどい目に遭ったと言いました。

その後、休戦協定後、あなたたち夫婦は、プサン（釜山）に移り住んだんですね。

はい。

1960年に軍隊を除隊されたとのことですが、それはなぜですか。

そのときは、革命があつて、リ・ショウバンの政権がつぶれて、それから、ユン・ボスン（尹潽善）という大統領があつて、そのときに、私は除隊しました。

今、日本語読みで、リ・ショウバンと言われましたが、イ・スンマン（李承晩）大統領の政権が倒れたのがきっかけということですね。

はい。

そのあと、あなたは、お仕事は何をしましたか。

除隊した原因は、そのときには、内閣の責任の政治であつて、大学的时候、チャン・ミュン（張勉）という人が内閣を受け持ったとき、その秘書長に当たる男と私が親友だったもので、軍隊をもう辞めて、何か、ほかの政治のほうへ目を向けたらどうかと、自分と一緒に、そうしてくれないかと、そう言われ、軍隊を辞めて、その仕事をするようになりました。

その仕事というのは？

今ソウルにある屠殺場があります。そのときの屠殺場は、大きな規模でもって、そのままを、自分の仕事をしようじゃないかと、そう言われて、その仕事に取りかかっていた。

今のお話ですが、ユン・ボスン大統領政権下での責任内閣制の下で、チャン・ミュン（張勉）総理大臣の秘書の弟の方ですかね。

はい。

と知り合いで、その二人で屠殺場の経営をしようとしたということですね。

はい。

それはうまくいきましたか。

いいえ、それが、約90パーセントぐらい、それが整備する途端に、
また軍事革命がありました。で、軍事革命があつて、それは、完全に
もうそのときからわやになってしまいました。

1961年の、その後の大統領、パク・チョンヒ（朴正熙）大統領による軍
事革命で、その計画は台無しになってしまったということですね。

はい。

それで、あなたは、プサン（釜山）の港湾組合で仕事をされるということに
なったということですかね。

はい。

ところで、戦後ですね、解放後、お父さんの土地なんですからけれども、お父さ
んの土地というのは、どうなってしまったんでしょうか。

それで、戦後、リ・シヨウバン大統領のとき、一度土地改革というの
がありました。それで、そのとき、相当、半分以上なくなって、その
以後、また、余り評判もよくないし、父も年取ったもので、自分でそ
の土地を売ったりなんかして、相当そのときは、整頓されていました。
土地改革というのは、農地解放ということですね。

はい。

農地解放で土地の半分以上をなくしたと。

はい。

で、その残りのも売ってしまったということですね。

はい。

それで、あなたの陳述書によると、韓国のキョンサムナムド（慶尚南道）の
ウルサン（蔚山）というところに息子さんがいらっしゃって、御夫婦もウル
サン（蔚山）に引っ越しをした。で、後に、1985年ごろに夫婦でチェジ
ュ（済州）に引っ越しをして、日本語塾を開いたということなんですね。

はい。

チェジュ（済州）に引っ越しをされたのはなぜですか。どういう動機からでしょうか。

やっぱりそのときは、いろいろ事情もありましたけど、私は、チェジュ（済州）のほうへ二人で旅に行きました。旅に行ってみたら、空気も清いし、また、穏やかなところなんで、一方考えてみたら、あのときは、うちの息子と一緒にいましたけど、いつも息子と一緒にいるわけにはいかないもので、そこで、家内と話し合って、よし、ここへ来て、二人で暮らしたらいいなあと。それで、おまえはその間、随分苦勞したからと思って、私は、そこで暮らすようになって、二人で相談の結果、そこにとどまるようになりました。

チェジュ（済州）というのは、非常に温暖な気候で、苦勞を掛けた奥さんと一緒に、和やかに暮らさせてあげたいと、こういうことなんですかね。

はい。

甲H第32号証の写真④を示す

この下のほうの写真ですが、これは、1955年ごろの写真ということですが、どこで撮影されたものでしょうか。

これは、ソウルのちょっと上のほうへ行ったら、ヤンピョン（揚平）というところがあります。ヤンピョン（揚平）のダムがあります。そこで、軍に勤めていたとき、軍の同僚と一緒に撮った写真であります。ソウルの北のほう、これも、38度線近くの場所で、軍務に就いているときということですね。

はい。

甲H第32号証の写真⑤を示す

この写真には、1962年2月25日という日付が書かれていますが、この写真は、これは何の写真でしょうか。

あのとき、陸軍歩兵学校からここへ移って、プサン（釜山）の埠頭で、第1中隊の中隊長をしておって、あのとき、ここで除隊して、一応、除隊しても、また、予備将校といって召集されるときがあります。その召集されたときの写真であります。

あなたは、既に軍を除隊していましたが、予備役として召集されたときの写真ということですね。

はい。

あなたのお話や、こういった写真を見ておりますと、あなたは6・25（ろくにご）動乱や、南北分断ということによる緊張というものを、肌で感じてきましたね。

はい。

日本軍による徴兵から、韓国軍の入隊、6・25（ろくにご）動乱という、この上ない厳しい時代を、家族を守って、あなたは必死に生きてきたと思いますが、軍隊の時代があるということで、軍人の恩給なども受けたのでしょうか。

ちょうど、その軍人に対する恩給は、パク・チョンヒ（朴正熙）や軍事革命の後に、それが実施されたもので、現在、その前に除隊した私は、それがありません。

軍事クーデターの後に恩給ができたので、あなたには恩給がないということなんですね。

はい。

甲H第34号証の1を示す

この書類、これはどのような書類でしょうか。

これは、現在の大統領の前のキム・デジュン（金大中）大統領のとき、そのとき、その大統領は、6・25（ろくにご）事件、また、ベトナムの戦争、そういったところに行って苦勞した将校とか兵士のために、

参戦勇士の証といって発行した、ちょうど証明であります。

6・25（ろくにご）動乱に、あなたが参戦して、参戦したその功績を讃える、その証明書というのは、キム・デジュン（金大中）政権以後になって、初めてあなたの手に渡ることになったということですね。

はい。

更に、勤労挺身隊というものについて、その見方について、幾つかお尋ねをしていきます。あなたは、キム・ポンニエ（金福禮）さん、奥さんらの話を聞いて、勤労挺身隊は、動員というのが非常に残虐な行為であったということを知りましたね。

はい。

ところで、勤労挺身隊というものがどのようなものであったのかということについて、韓国人一般の人々には広く知られているのでしょうか。

その当時は、大概知りませんですけど。

解放後ですね、解放後、知られたのかというと、知られてー。

知られていませんでしたけど、後からとにかく、女子勤労挺身隊とか慰労挺身隊の区別はありませんでした。それで、とにかく女性の人が、あのときに、日本のほうに行って、軍の性奴隷として引っ張られていったということはよう知っていました。

そこでお聞きしますが、勤労挺身隊というのと軍慰安婦というのは、区別して知られているわけではないということですね。

そうです。

みんなひとまとめにして認識されているということですね。

はい。

ひとまとめにして、どのように認識されているかという？

軍慰安婦といって。

言わば日本軍の相手をさせられていた人たちだと。性奴隷であったというふ

うに認識されているということですね。

そうです。

ところで、勤労挺身隊というのは、工場で強制労働をさせられたという人たちということなわけですが、なぜ、勤労挺身隊も性奴隷であったというふうに認識されてしまうのでしょうか。あなたが、こうではないかと思うところをお話しいただきたいと思います。

はい。あのとき、戦争のまっただ中で、日本のほうでは、勤労挺身隊というだけではなくて、また、徴兵とか、また、いろんな人を強制動員させて、連れていくようになって、そのとき、日本人たちは、自分が生きるがために、どうすりゃあいいか、そういったことを随分頭の中において暮らしたと思います。それで、そのとき、名古屋から、少女たちを連れていったときにも、ただ、女子挺身隊かな、その区別は分かるような状態ではありませんでした。それで、そういった状態なので、解放後、そんなふうで、中でも、大方の人、大方の人じゃなくて、もう全部の人が、慰安隊、その女性は、一度行った女性は、みんな軍の性に奴隷された、その女性だと、そういったふうに思っていたのであります。

韓国人の側から見て、韓国の側から見て、女の子が連れていかれたということが問題なんですね。

そうです。

女の子が、その戦時中のさなかに連れていかれているということが、そのような、日本軍の相手をさせられていたんじゃないかという認識を生んだんじゃないかと思うということですね。

はい、そうです。

元勤労挺身隊員の人がそのような見方をされると、それは、結婚の障害になりますか。

大きな障害になっています。

元勤労挺身隊員であったキム・ポンニエ（金福禮）さんの夫であるあなたは、勤労挺身隊は、性奴隷だなどという誤解はしませんでしたね。

はい。

それは、その理由はなぜかということになれば、どういうことになりますか。

私は、その勤労挺身隊員のことに対しては、初めからしまいまで、詳しく知っていますので、私には、その疑問ということは、私にはありませんでした。

詳しくというのは、あなたが、実際に、名古屋に動員される際に同行した。また、地震後にも名古屋に来て、倒壊したその工場も見ている。そういうような経験があったからだということですかね。

はい。

その当時、名古屋三菱に動員される少女たちに、一緒に同行した韓国人男性というのは、あなた一人なんですよ。

そうです。

あなたは、非常にまれな韓国人男性だったと思いますが、どうでしょうか。

そう思っています。

ところで、あなたの御両親は、その勤労挺身隊ということについて、どのような認識だったのでしょうか。

私から聞いて、また、帰ったポンニエ（福禮）からも聞いて、で、それを私のようによく知っていますんで、私のように認識していたと思っています。

非常に失礼な質問になると思いますが、あえてお聞きしたいと思います。あなたが、勤労挺身隊というものの実態を、あなた自身が同行して、見たとか、そういうようなことがなかったとしたら、あなたが、勤労挺身隊として日本に連れられていた女性と結婚するということはある得たのでしょうか。

恐らくなかったと思います。

そういうこともあって、キム・ポンニエ（金福禮）さんの御両親は、あなたのような人と結婚できて、取り分け喜んでくれたということがあったんですね。

そうです。

ところで、あなたの妻やあるいはあなたの妹さんが、勤労挺身隊員であったということが周囲の人に知れば、性奴隷であったという疑いを持たれることになりますか。

もうそれは、疑いはもちろんのことと思いますが、それを、そういったことがあったら、私は、積極的にそれを説明してやりたい。やったことがあるし、また、これからもそうするつもりです。

ところで、奥さんのキム・ポンニエ（金福禮）さんについてですが、キム・ポンニエ（金福禮）さんが、前回この法廷で証言をされました高橋信さんが、元勤労挺身隊員の人たちを調査するということに関して、奥さんが何か言っていたことがあるんですね。

はい。

どのようなことを言っていましたでしょうか。

高橋さんは、もうそういう人はまだいないかとか何か聞いたときに、まさか、私がそういったところへ行ってきましたと名のって出る人はいないだろうと、そういったことがありました。

それでは、この裁判に至る経過について若干お聞きします。三菱の追悼記念碑の建立についての話ですが、これを、あなたは、いつごろ、だれから聞きましたか。

あのときは、年代が1988年の12月ごろ、高橋信先生から電話で知らされて、知るようになりました。

あなたは、追悼記念碑の除幕式に参加されたんですね。

はい。

そのとき日本に来られ、高橋信さんと直接会うことができたということですね。

はい。

奥さんは、そのとき、追悼記念碑の除幕式に出なかったんでしょうか。

あのとき、私が言いました、一緒に行こうと。だが、うちの家内の言うことは、私はどうしてもそこへ行かせませんと。その理由は何かと
いったら、もしかそこへ行ったら、その場所を2度と見たときに、自分
はそこで倒れてしまうと。気絶してしまうと。親しい友達がこの場で
死んだ。だから、あのときは、あんだだけ苦労した場所をまた見ること
が、どうしてもできないと。そして、行くのをやめると、そう言って
いました。

奥さんも非常に辛かったんですね。

はい。

奥さんは、その後、結局、追悼記念碑の前に立つということはありませんか。

はい、1度ありました。

結局、後にも先にもその1度きりということですね。

それきりです。

ところで、あなたは、その追悼記念碑の碑文を見て、思ったことがあるとい
うことですね。

(うなずく)

最初、その碑文を見たときの思いと、その後、その碑文についての思い、そ
のへんの変化を、ちょっと簡単にお話しいただけますかね。

はい。初め来たときに、私は、いろいろその場面を見たときに、初め
に、除幕式に、その碑に書かれていたその碑文というんですかね、そ
れに本当に、感激というか、感激そのものをもらいました。そこに何

と、「悲しみを二度と繰り返さぬよう、ここに真実を刻む」と。その言葉に、私は涙を流しました。それで、初めは、それを見たけど、あれからずっと私は日本のほうで教育を受けてきましたけど、妹たちが、そのときまでずっとやってきたのを、いろいろ考えてみて、これが真実そのまま本当なのかなあと、そういった思いでしたんです。で、その後、高橋先生の意向、支援する方々と、数回にわたったときに、本当にこの人たちは誠の人間だ。本当にこの人たちは、私は一生忘れられない人たちだ。そして、日本と韓国と、この人たちを、一緒に手をつないで、これから生きていかれた、一生懸命に、親善に力を入れようと、そういった思いをしました。

その「真実を刻む」という言葉に、最初は疑いを持たざるを得なかった。しかし、その後の活動の中で、その「真実を刻む」という言葉が、真実であると実感するようになったということですね。

はい。

ところで、奥さんは、本件提訴後の2001年の2月13日に亡くなりましたね。

はい。

本件裁判を起こした直後のことですが、奥さんが亡くなったことについて、あなたはどう思いましたか。

本当に心辛い思いをしました。死ぬ間際に、私の手をつかんで、私はあなたの見守っているそのそばで、こうして息を止めていくのは幸せであります。一つ前を思い起こせば、今訴訟にかかっているその訴訟を、和解というんですかね、うまく判断を見ることができなくて死んでいくのは、ちょっと思い残しであります。そして、本当に涙をぼろぼろ流して、息を止めていったのであります。

本件の和解というふうに奥さんは言われたのですかね。

はい。

その和解とは、どのような意味でしょうか。

だから、国と三菱は、それを謝罪と、当たり前で賠償をして、そして、その和解のとおり、日本と韓国が親善の、これからの道のりに、たどっていくのを自分が見たらいいのに、それを見ずに死んでいくというのがちょっとおしいと、そう言っていました。

三菱及び国は、その責任を認め、謝罪と賠償を行い、その次に、将来の友好関係ということを見据えて言った言葉だということですね。

はい。

甲H第35号証を示す

「共存する地球村を」と題する書面ですが、これは、1994年、東南海地震の50年の追悼記念式にあてたあなたの文章ですね。

はい。

ここには、共存する地球村を目指したいとの話がかかれており、また、国、三菱は早期に責任を認め、地球村を作るよう将来目指していきたいということが書かれていますね。

はい。

甲H第36号証を示す

これは、あなたを取り上げた新聞記事ですが、どういったことを取り上げた記事なんでしょうか。

これは、昨年あったワールドサッカーのときの、私のボランティアのときの新聞に載った記事であります。

サッカーの、日韓共済のワールドカップチェジュ（済州）会場というのがあって、そこの外国人案内などのボランティアを、あなたが志願してされたということですね。

はい。

こうした活動というのは、あなたが、国際交流や国際親善を図ろうとする活動の一環ということですね。

そうです。

あなたは、現在、チェジュ（済州）の地元のサイクリングクラブでも活動をしておられるというふうに聞きました。この活動についても、胸のうちに何か計画はおありなんですね。

そうです。このサッカーのとき、ボランティア、また、今は私は、チェジュ（済州）のほうで、サイクリングの顧問をやってますけど、その人数が約80名ぐらいになっています。この目的は、私は、日本との交流が一番欲しいんです。私は、ここで教育を受けました。そして、また、ここの支援の方々とも親しくなりました。支援の方が一人、二人じゃなくて、弁護団の方も多いです。この方と私は、今日は話すことができません。死ぬまで一生懸命にしよう。そして、この交流のためには、何か催しが欲しいなと思って、サイクリングとか、サッカーのボランティアをやって、今までやっているその状態であります。

こうした、あなたの将来を見据えた国際交流に向けての活動のためにも、この本件についての解決というものは、速やかに行われなければならないと、こういうふうにお考えなわけですね。

はい。

最後に一言、裁判官に、この席で言っておきたいことがあるということで、あらかじめ文章に用意していただいたですね。

はい。

裁判所にお願いですけれども、あらかじめ用意した文章が若干数行あります。それをここで読み上げて、調書においては、末尾に添付という形でお願いしたいと思います。あなたが自筆で書かれた文章はこれですね。

はい。

最後、起立して、お話ししましょうか。

はい。「私達は明治時代から苦しい時代を歩いて来ました。しかしこの裁判を通じて 日本国と 三菱に適切な賠償と心からの謝罪をしてもらい その上で新しい 親密な関係を築けたらと心から願っています このことは 次代を担う若い人達のためにも大切なことだと思います 裁判所におかれましては 正義と条理に満ちた判断を下さるよう強くお願いいたし」で 私の証言を終わらせていただきたいと思います。

裁 判 長

それでは、調書に添付しておきます。

以 上

私達は明治時代から苦しい
時代を歩いて来ました。

しかしこの裁判を通じて 日本国と
三菱に適切な目覚めと心からの謝罪
をしてもらい、その上で新しい親密な

関係を築けたらと心から願っています。

このことは次代を担う若い人達
のためにも大切なことだと思います。

裁判所におかれましては正義と

奉理に満ちた判断を下さるよう

強くお願いして私の証言を

終わりたいと思います。

金中坤